

はばたき21

“自分を楽しむ”

普通って何？

通信

2013.3
No.25

特集

はばたき21インタビュー 角間 惇一郎 さん・小口 テル子 さん

● 地域のチカラ講座2012

「自分を見つめなおしてキラキラ人生に!」

「私の“これから”をみる～今までの10年から～」

● 男女共同参画推進講座

「セクシュアル・マイノリティの悩みはみんなの悩み?」

～電話相談にみる性の多様性～



表紙は、区民学習活動支援事業対象講座「お絵かきコミュニケーションで見つめる『子どものころ』『私のころ』」の参加者の作品をもとに構成。怒りなどの感情を右脳とつながる左手で描くのがポイントです。



11月3日(土)、11月10日(土)

「自分を見つめなおして

キラキラ人生に!」

講師：加藤 安津香さんの感想

秋晴れの11月3日(土)、10日(土)、2回にわたり、簡単なコーチング体験を交え自分を振り返ってみるという講座が、10名を超える参加者を迎え開催されました。初めは緊張気味だった参加者の皆さんも、対話がスタートするとリラックスし、お話が弾んで中断するのが難しいほどでした。「普段、意識していない自分の気持ち」「大切にしていること」「今後どのようにしていきたいか」に目を向ける不思議な時間と空間。2時間の講座中に、参加者の皆さんの表情はいきいきと、どんどん変化していききました。ご自分の今後の方向性を考える方や、人生を楽しみたい方が、一歩前に進むきっかけになったのではないのでしょうか。



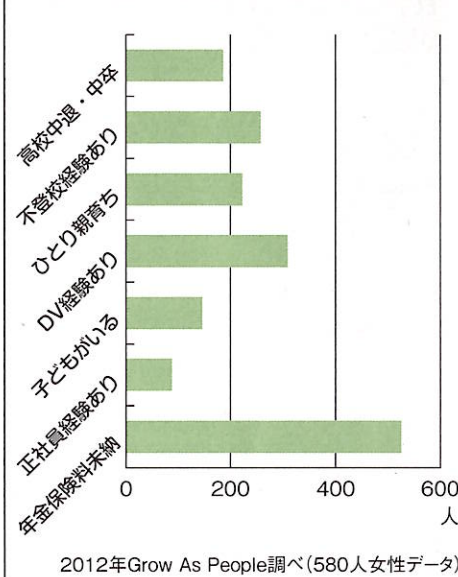
講座が終了した時の、参加者の皆さんの笑顔、キラキラしたお顔が本当にキレイで、忘れられない2日間になりました。日常生活において、丁寧に対話することや、自分の気持ちにゆっくり向き合うことの大切さを改めて私も学びました。皆さんと一緒に楽しく、お風呂のような温かい場が作れたことを嬉しく思います。今回の講座開催のリクエストもいただき、大変感謝をしております。また、お会いできることを楽しみにしております。

※2 地域のチカラ講座…男女共同参画社会を目指す区民が、その能力・知恵・知識等を発揮し講座を企画し、講師として活躍する場を提供することにより男女が平等に参画できる社会の実現を促進することを目的とした、男女平等推進プラザ「はばたき21」主催講座。

この世界にいる女の子たちは、立場を知られるのを恐れて、何かあっても泣き寝入りすることが結構多い。相談相手がいらないから知識も乏しい。特にお金関係。皆さんが、風俗や夜の世界で働く人にもイメージは、借金の形や、遊ぶ金欲しさにやっているというもの。実際、半分弱はお金欲しさに働いているんですが、もう半分は、低学歴や生活が苦しい、子どもがいるという理由で働いているんですね。16〜18歳で子どもを産み学歴を積み、シングルマザーで、その子どもたちがまた学歴がなく…と連鎖していく現実もある。

お客さんや店から認められると、今まで評価されたことのない人たちが多くいて、その環境が気持ちよく、自分の居場所になっていくんです。長い時間浸りすぎちゃうと価値観がすぐくずれてきます。彼女たちに必要なことは多様な価値観と、社会との接点を増やしてあげること。多くの人が

「夜の世界で働く女性たち」の背景



ちを巻き込み、彼女たちもこちら側に巻き込む必要がある。多様性は一つのキーワードになるような気がしますね。

今の時間に何かしてあげたい相手が、何をしているか想像できるかできないか。

何となく何をしているかは、すぐわかる。あの人はこうしているだろうとか。それくらいまで踏み込まないと何ともできないと思う。届かない相

僕は思いつきで動くところがあり、夜の世界は恐ろしいけど、見てみたいと勢いでやってしまった。冷静に考えると、一般的には、自分の人生を勢いで決めるというのは難しいですね。僕、天然パーマで、思春期はコンプレックスで悩んでいた。でも、ある日気づいたんです。僕の頭なんて誰も見ていないって。(笑) 誰かが自分のこと、こう見えているなんて自分の中にしなくて、自分がそう思い込んでいただけだった。だから、僕が風俗関係のことに入っていくのがいいじゃないかって。でもよくて、だってみんな見ていないじゃないかって。一番困ったのが妻の両親に何て言うかでした。(笑)

妻はキレイでしたね。月給がいきなり3万円とかになったんですから。手の顔が見えないと、勝手に自分一人で動いて、ダンスしていることになり上手くない。気づいてしまったことがあれば、もっと中まで入り込んでいってもいいんじゃないかな。

越谷は結婚してから住んだ土地なんです。越谷って、埼玉で5番目に人口が多くて、その中でも若い人が一番多いんですが、若い人が地元で目を見せる機会が少なかった。地域の大学生に何か

もともと僕は途上国に行きたかった。困ってそうじゃないですか。見たこともないのに。

「夜の世界で働く女性たち」※1を支援する角間 惇一郎さん(29歳)。ハードルが高そうな世界に「入口がたまたま開いて、入れるようになっていたのに入っちゃった」とさりと答える。人に言われたことではなく、自分で見つけた課題に向かった時、恐れも恥じらいも感じなかったと言う。夜の暗闇を照らす角間さんのストーリーをうかがいました。

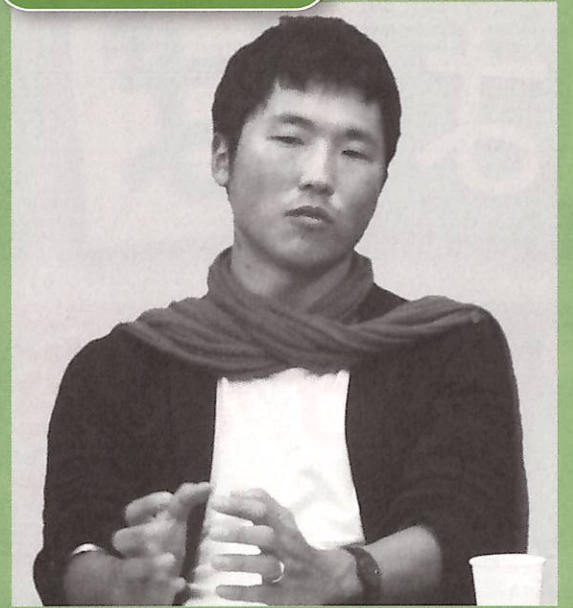
できないかなと、サラリーマンをしながら活動していました。

ある日、開催したイベントに、越谷で風俗店を経営している人がたまたま来ていた。名刺交換の時は「わあ怖い」「変な感じの人がいるぞ」と戸惑いました。でも、どうやら同じ年で子どももいて、熱心だし、話を聞いてみようかなと思ったんです。彼が言うには、風俗店で働いている女性たちは、本当にいろいろな問題を抱えている。ちょうど大阪で風俗嬢がマンションに幼児2人を置き去りにして、餓死させた事件と時期的に重なっていたんです。彼女たちが子どもを産み育てるタイミングで、こういう事件と重なる現状があり、彼は何かしなくてはと思っている。それが、すごいショックで。ずっと途上国のことを思っていたのに、自分が気づかないだけで、この日本にも、自分が活動しているこの地域にも、困っている人た

ちがいて、何で困っているかも完全にわかっていなくて、放置されている人たちがいる。

ああ何かこれは大変、ああ何か気づいてしまったという感じで…。

彼の話がずっと引っかかって、頭の中がもやもやするんですよ。僕が格好良く思う人って、自分の気づいた課題を放置してこなかった人たちだったんです。誰かに言われて助けに行くんじゃなくて、自分で何かを届けているんです、その人たちは。たまたま僕は流れの中で気づいた。もやもやしなながらも会社を辞め、彼のところにインタビューに行った。1年半で約600人の夜の世界で働く女性たちの話を聞いて、グロー・アズ・ピープルを立ち上げました。



かく ま じゅんいち ろう

角間 惇一郎さん

(一般社団法人 Grow As People 代表理事)
(越谷市男女共同参画推進委員会委員)

1983年 新潟県生まれ

2001年(18歳) 大学に入学。青年海外協力隊の広告に触発され半年で中退

2002年(19歳) 建築関係の専門学校(夜間)へ入学

2004年(21歳) 建築士の資格を取得
ゼネコンに就職

2006年(23歳) 結婚

2007年(24歳) 第一子誕生

2009年(26歳) NPO「まちたみ」設立
埼玉県越谷市で地域コミュニティ活性化支援を行う

2012年(29歳) Grow As People
設立。「夜の世界で働く女性たち」の
就職・起業、生活支援を開始

「夜の世界で働く女性たち」へ向けた
Grow As Peopleの取り組み

- ★ お金の学習：収入と支出を見直し、貯金を促す。
- ★ 調査とまとめ：どんな人が、何に困り、なぜ働くのか？を把握し開示する。
- ★ シェアハウスの提供：地域の遊休放置物件をリノベーション(改装)し、低価格で提供。
- ★ かわいい × カジュアルプログラム(「Crejo」プロジェクト)の推進：「かわいい」感性をビジネスに活用。

Grow As Peopleの問い合わせ先：info@growaspeople.org

自分を楽しむ

「男だから、女だから、もう歳なのだから…」と自分を制限して、世間のいう「普通」の枠に収まりがちな私たち。誰がその枠を決めたの？ 今の自分を楽しむには？

普通って何？

男として

制限から解放する

役割ルール

母親だから

女として

役割のないところで

自由にする

父親だから



小口 テル子 さん



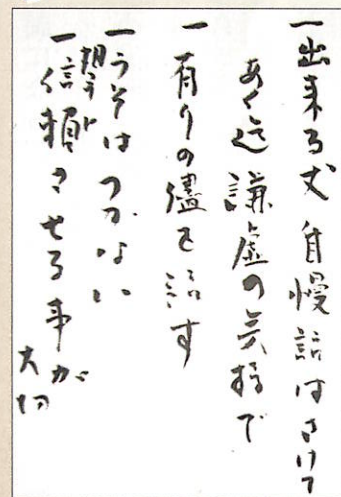
角間 惇一郎 さん

今日も一つ新しい発見をするという言葉が好きです。

60歳で都立病院を退職して、平成3年から浅草植村医院で働いています。仕事は収入を得るためのものだけど、嫌いじゃない。

「小口さんにはバイタリティがある」と周りの人に頼られたり、役に立っているのも嬉しい。若さとは、実年齢ではなく精神年齢だと思う。だから、歳は考えたことないし、関係ないと思う。考えてもどうしようもないしね。

私、感激したことはすぐに書き留めるんです。学生の時も紙に「テル子、がんばれ!」と書いて、いつも眺めていた。今も、心に残る言葉は書いたり、気になったことは図書館に行って調べたりしています。



今回のインタビューにあたり書き留めていたメモ

男じゃなきゃできないってこともないしね。



旅行中の小口さん夫妻

自分と違う性格の人とお友達になるのも、自分の勉強になるから。私、以前小説を書こうと男友達から書き方を習っていたんですよ。プラトニックラブと言うのかしら。(笑) 精神的なつながりは大切ですね。お友達は年齢・性別に関係なく、いろいろいた方がいいですよ。

女だからって損したと考えたことはなかったです。女だから子どもも産めた。女だって優秀だったら、何でもできる。私は、男女平等だと思ってきました。

今やっていることが好きなことかどうか。本当にそれだけなんです。

僕は幸運にも自分の好きなことを知る機会があったんです。それは「誰かの役に立つこと」。その好きなことを自分がわかっていれば、あとは誰に何をするかを、やりながら考えればいい。「普通」はどうするかなんてどうでもいい。

今の若い人たちを見ていると、自分の好きなことが何なのかわかっていない人が多い。人に言われて好きになるとか、好きにならなきゃだめだと言って言われて好きになっている人っているんですよ。

自分の好きなことは、誰かに言われたからいいと

思っているんじゃない? 信じ込んでいない? と言いたい。ちょっと疑ったほうがいいと思いますね。

冷たい海に魚を捕りに行くぞと、高い所から押し出されて飛ぶ一羽目のペンギンを意識しています。

「あいつが飛んだから大丈夫だ」

好きなことをやりなさいと言うことは簡単なんですけど、一番説得力があるのは、好きなことをやってどうにかになっている人がいるということ。僕は“飛んだ”経験があるから、何かやりたい人には、背中をドンと押すことはできますよ。

世の中をちょっとかわいく「Crejo」プロジェクト

夜の世界で働く女性たち「くれじょ=ちょっとクレージーな女の子」だからこそもっている「かわいい」という感性を、オフィスに取り入れたところ、すごく「かわいい空間」ができた。彼女たちが言ったことが形になり、評価され、収入を得る。「こんなこと経験したことがない」と感動する訳ですよ。

みんなと違った感性を持って、みんなと違った生き方をしているから、みんなと違った所へ追いやられて、自己表現の手段や受け入れられる場所がなかった。自分の中に持っているものを、堂々と出せる場があるだけで全然違うのです。くれじょの感性を社会に還元すること一番力を入れています。



「Crejo」のロゴ



オフィスの風景

12月1日(土)
「私の“これから”をみる
～今までの10年から～」
講師：市村 有花里さんの感想

昨年の はばたき21 設立10周年を受けて、自分にとっての10年間を振り返り、これからについて考える講座です。

(講座の流れ)

- ①自分の年表を作り、今の自分にどのようなつながってきているのかを確認。
- ②グループで「自分について、作りながら気づいたこと」を話します。

話すことで、何を大事にしてきたのか、自分に強い印象を与えるものは何か、再確認できます。語る側は、聞いてくれる人を信頼して話し、聞く側はプライバシーの尊重と傾聴の気持ちを大事に聞きます。程よい距離感を保って、無理強いはないように気をつけます。



本人の感情を表した絵

1人1人の話の中から、いろいろな人生が見えてきました。普通のことなんて何1つなく、誰の人生も、どの時間も違ってきます。

1人1人の違いを認め合い、かけがえないものだということを認め合うきっかけにもなりました。

そのように相手を尊重することは、そのようにできる自分自身の尊厳を高めます。このワークを自分自身を生きるきっかけに使っていただけたら幸いです。

ある日、中学生になった息子が、ラジオで「潜在看護師、助産師の方、職場に戻ってきてください」という放送を聞いて、「お母さん、戻りなよ。僕たちが家のこと手伝うから」と言ってくれたんです。その後、助産師に復帰し、4年間経験を積みました。3人の助産師で1ヵ月100人以上のお産を担当するという目の回る忙しさだった。勤務先が遠いこともあり、その頃、東京都職員の募集があったので、試験を受けてみようと思い、勉強に励みました。大卒程度が条件だったから、法

律を勉強したり苦勞しましたが、既に実地訓練を積んでいたの、実技の方は有利でした。42歳で合格し、都立病院で働き始めました。

最愛の夫との別れ

自宅で3年間介護していた夫が、昨年亡くなりました。自分が治してやろうと思っていたので、亡くなってから毎晩泣いていました。亡くなると、いいことかと思いきや出さないうえです。仕事で夜遅く帰ってくると、温めてくれたんですよ、ドラマみたいに。喧嘩してもいつのまにか仲良くなっていました。

何の喧嘩もしない夫婦なんて、嘘ですよ。我慢しないで言い合った方がいいです。



都立病院に勤務していた頃

逆境をファイトで乗り越える

1人目のお産の後、夫が結核になり、生活は楽ではなかったです。夫の兄に、助産師として働くよう言われたが、当時は預ける所もなかったし、子どもと一緒にいたかった。

まだ26歳の私は、落ちるところまで落ちたら、後は這い上がるだけだと思っていました。「蜘蛛の糸」の話を聞いて、どんなに落ちても何とかなんとかなると思つたし、ファイトがあつた。

きつと夫は、「生まれつき天性の明るさで接してくれてありがとう」と言ってくれと思う。飛行機乗りだった夫と一緒に宇宙旅行しようと思っていたのね。

1945年4月、14歳で内地の満蒙開拓団の付属看護婦養成所に入りました。第3期生になります。開拓団の花嫁候補という名目でしたが、満州で役立つよう、看護師と助産師になるための勉強をさせてくれたんです。私は、7人きょうだいの

満蒙開拓団(内地)への入団。そして終戦

4番目で、上に2人姉がいて、最初は4つ上の姉が入団を希望していました。茨城県の石岡あたりに、満州と同じ施設を作り、午前中は、槍の訓練や山羊の放牧をやっていました。その療養所で、満州から帰国した、凍傷や結核に罹った人やホームシックになった人たちの世話をしたんです。

終戦後、17歳で看護師の免許を取りました。母が、「産婆は文字通りおばあさんになってもできるのよ」と、助産師になることを勧めてくれた。あそこ病院に勤めながら、市ヶ谷助産女学校に通い、19歳で助産師の試験に合格しました。成りたての頃は、症例数を積むために、つらい経験もしました。法律も違うから、今では考えられないこともありましたね。

※1 満蒙開拓団：1932年からアジア太平洋戦争終結まで、当時の国策によって中国大陸の旧「満州」、内蒙古、華北に入植した在地軍人や農民の移民団。

Interview



こぐち テル子さん
(助産師)

- 1930年 茨城県生まれ
- 1945年(14歳) 満蒙開拓団に入団 付属看護婦養成所で学ぶ
- 1949年(19歳) あそか病院に勤務 市ヶ谷助産女学校入学
- 1953年(23歳) 結婚
- 1954年(24歳) 第一子出産 退職
- 1960年(30歳) 第二子出産
- 1966年(36歳) 助産師に復職
- 1972年(42歳) 東京都職員採用試験(助産師)に合格。都立病院勤務
- 1991年(60歳) 都立病院定年退職 浅草植村医院に勤務
- 2011年(81歳) 夫が他界 現在も、浅草植村医院に助産師として勤務

結婚と出産

助産師として妊婦さんに指示すると、「お産もしてないのに、よくそんなことが言えるわね」と言われちゃう。確かに出産の経験をしてみないと、わからないこともたくさんあるので、23歳で結婚し、子どもを2人産みました。私、若い時はもて、お相手もたくさんいたんですが、実家の隣村に住む、お兄さんのような人と結婚しました。帰省する時いつも一緒にになり、当時ビニール会社を経営していた夫は、羽振りもよく見えませんでした。特攻隊にいた時の姿も私はかっこいいと思っていました。2人とも、神仏を拝んだり、人頼みせず、自分の力を信用するという価値観が一緒だった。夫は飛行機乗りだったから、頭も良かった。(笑)

男女共同参画推進講座の感想

セクシュアル・マイノリティの悩みはみんなの悩み？ ～電話相談にみる「性の多様性」～



【左】宇佐美翔子さん、【右】原ミナ汰さん

昨年度の情報誌「はばたき21通信」NO. 23のインタビューでは、多様な性の存在と社会的な無理解から、「本当の自分」を生きることが難しい人たちがいることを知りました。そして今年度、この講座に参加して、相談する側の思い、受ける側の難しさに触れる機会を得ました。事例を通したワークショップではセクシュアル・マイノリティの悩みに対して、どのように答えたら良いのか悩んでしまう場面も…。「相談を受けて言葉が出ないときは、『ごめんね。言葉が出ないんだよね。一緒に考えよう』でいいのです。」

“共生社会をつくる”
セクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク
講師：原 ミナ汰さん、宇佐美 翔子さん

という翔子さんからのアドバイスに納得。
この人なら一緒に考えてくれるという安心感がいか
に大切か、気づくきっかけになりました。“相談員と
相談者は対等な関係にある”というミナ汰さんは、相
談者に対して「相談してくれてありがとう」と優しく
声かけることを忘れません。「身近な人がサポートで
きることが一番良いこと」と言い切るお二人。隣にい
る人の悩みに無関心でなく、知恵を出し合い、必要な
ことを一緒に考えられることが、どんな人にとっても
住みやすい、暮らしやすい社会へ近づくヒントになる
のかもしれないと思いました。

情報誌編集委員 鈴木

もっと身近に「はばたき21相談室」

●ここと生きかたなんでも相談 ……………

自分の生き方や人間関係、家族や子育てのこと、
配偶者からの暴力などの相談に女性のカウンセラーが応じます。

火曜日・土曜日 10時～16時
水曜日・木曜日 17時～21時
(火曜日・土曜日は無料で一時保育をご利用になれます。要予約。)

電話相談・面接相談どちらも可
(面接相談は女性のみ。電話相談はどなたでもご利用いただけます。)

電話 03-5246-5819 (予約専用)

●女性弁護士による法律相談 ……………

離婚や親権、相続などの法律相談に女性弁護士が応じます。

第2水曜日 13時～16時
第3木曜日 10時～13時
第4火曜日 16時～19時

面接相談 (女性のみ)

電話 03-5246-5819 (予約専用)

●DV 専門電話相談・DV 電話相談週間 ……………

もしかしてDV…？ そう思ったらひとりで悩まず、お電話ください。

・DV 専門電話相談

4月からDV 専門電話相談が月1回に変更になります。
毎月第3水曜日 13時30分から16時30分

・DV 電話相談週間 (台東区パープルほっとダイヤル)

2013年「女性に対する暴力をなくす運動」期間に
DV 電話相談週間を実施します。
2013年11月12日(火)～25日(月) 13時から21時 (18日(月)休館日除く)
どなたでも 電話 03-3847-3611 (予約不要)

相談者の声

連続5回の相談でした。1回ごとに、これ
まで見えなかったことや、もっと改善
できることが見つかり、行動した結果
を、また相談して次につなげることが
できました。

対人関係の悩みを相談しました。自
分の思考や感情の癖に気づいたこと
で、少し楽に相手とつき合えるよう
になりました。

カウンセラーとの対話を通じて、問題点
が整理され、解決の糸口が得られまし
た。それに自分自身で気づくことが
でき、自信につながりました。

台東区男女平等推進プラザ「はばたき21」

交通機関

- JR 山手線・京浜東北線「鶯谷駅」南口 徒歩約15分
- 東京メトロ日比谷線「入谷駅」1番出口 徒歩約8分
- 銀座線「田原町駅」徒歩約12分
- つくばエクスプレス「浅草駅」A2出口 徒歩約7分
- めぐりん「生涯学習センター南」・「生涯学習センター北」共に徒歩3分
- 都バス「入谷2丁目」徒歩3分・「西浅草3丁目」徒歩5分



編集・発行 台東区総務部人権・男女共同参画課 男女平等推進プラザ「はばたき21」
〒111-8621 台東区西浅草3丁目25番16号 生涯学習センター4階
TEL 03-5246-5817 FAX 03-5246-5814 E-mail habataki21@taitocity.net

開館時間 9時～22時

休館日 第1、第3、第5月曜日(祝祭日にあたる場合はその翌日)・年末年始(12月28日～1月4日)

情報誌編集委員 市村有花里・榎本令子・加藤厚子・鈴木美千子・三村睦

はばたき21通信 25号
公募による情報誌編集委員
が企画編集しています。